

報告 Report

中学生向けワークショップの実施

—木のスプーン作り—

原稿受付 2015年5月14日

ものづくり大学紀要 第6号 (2015) 54~59

土屋悠^{*1}, 松本宏行^{*2}, 西村俊夫^{*3}

*1 吉井西・沼田西中学校 非常勤講師(美術) <上越教育大学大学院 芸術系コース(美術) 修士課程修了>

*2 ものづくり大学 技能工芸学部 製造学科 准教授

*3 上越教育大学 芸術系コース(美術) 教授・副学長

1. はじめに

中学生たちに“ものづくりや表現することの楽しさ”や“ものを作る大切さ”を伝えるために、本大学付近の中学生に参加を呼びかけ、ワークショップ(workshop: 以下文章中はWSと表記)を実施した。

現在、中学生たちの学校や生活環境を見てみると、ものづくりに関わる授業時数の少なさや、受験勉強などによって、あらゆる面から“ものづくり”などの体験的な活動を行う機会が、殆ど無い現状がある。また、ものづくり大学では若者向けに、ものづくりの楽しさや大切さを伝える教室やワークショップを沢山行っているものの、中学生を対象として実施したものは圧倒的に少ない。

このような中学生の実態に危機感を感じたことから、ものづくり大学において“ものづくり”を中心とした体験的な活動を行う機会を中学生たちに設ける必要があると考えた。

この報告においては、WSの概要や内容、模擬WSの実践、WSの実施・様子、WSを通してのこれからの課題について考察していく。

なお企画発案者である土屋は製造学科の第八期卒業生であり、WS発案時は上越教育大学大学院に所属していた。土屋はこのワークショップを通して、修士論文を執筆することを目的としている。

2. ワークショップの概要

現在、中学生のみならず我々人間は科学技術の大きな進歩による劇的な環境の変化から、日常的にもものを作ることや何か表現することが少なくなっている。特に子どもたちにおいては、「携帯・パソコン・ゲーム機の普及による仮想的環境の没入」や「学歴偏重主義にみる受験戦争の激化(主要5科目中心の勉強)」によって、ますます体験的な活動を行うから離れている。これは都市近郊などの人工的な物が多い場所において、特にみられる傾向だと考えられる。

その中でも中学生たちは、学校教育において「美術科」や「技術・家庭科」などの実技教科を通して、表現することやものづくりを学ぶことになるが、授業時数が他の教科と比べ極めて少ないため、きちんとした学びが行われていない現状がある¹⁾。また、日常生活

においても塾や習い事などに通い、休日においては部活動を行っている中学生が大半であり²⁾、非常に落ち着きのない生活を送っていることから、ものづくりなどの体験的なことに接する機会に恵まれていないことが容易に想像できる。

また、本大学においては若者向けに「おもしろものづくり教室」「高大連携」「こども大学」などを実施して、ものづくりの楽しさや大切さを伝える教室やワークショップを沢山行っているものの、毎年本大学にて発行されている『ものづくり大学 紀要』の「青少年教育活動報告」^{3~7)}を見てみると、中学生を対象として実施したものは圧倒的に少ないことが分かる。

このような中学生の実態に危機感を感じたことから、ものづくりを中心とした体験的な活動を行う機会を中学生たちに設ける必要があると考えた。実施することによって、中学生たちにもものを作ることや、表現することの“楽しさ”や“大切さ”に知ってもらい、少しでも日常生活において“ものづくり”を意識してもらえればと思った。

3. ワークショップの内容

本WSでは、中学生でも扱える材料であり、出来るだけ沢山の道具に触れさせたいと考えたことから、材料として「木」を選択した。木を「切る」「削る」「彫る」という行為を通して、木の表情の変化、加工することの楽しさや苦勞を感じてもらい、ものづくりの面白さを知ってもらえたらと考えた。なお、木の種類は中学生でも扱えるように比較的柔らかいものであり、年輪の模様が浮かび上がるよう木目も詰まっている「米松」を使用した。

木を使った題材としては、「自分だけのスプーン—木のスプーン作り—」という題名をつけ、木のスプーンを作ることとした。しかし、ただの木のスプーンではなく、題名の「自分だけのスプーン」とあるように、自分が持っていたと思うスプーンを作るものである。スプーンというと、“使いやすさ”や“美しさ”などを優先的に考えがちであるが、それらを一義的な目標と定めないので、ものづくりに幅を持たせ、ものづくりの楽しさを中学生たちに味わうことが出来ると考えた。そこで本WSにおいては、様々な形を制作できるように、角材の厚さを普通のスプーンを作るよりも太く設定(15mm→30mm)し、スプーンのかたちに関しては、作る前からしっかりと考えてもいいが、木を「切る」「削る」「彫る」という作業を行いながら生まれてくるものもあるとし、厳密な計画は不要であり、自身の感覚と力加減を確認しながら作業を進めていくように配慮した。

なお、スプーン制作後は制作したスプーンをお互いに鑑賞し、お互いの作品の良さや面白さを共有し合い、ものづくりの良さを実感するようにした。従来のワークショップのように作りっぱなしで終わるのではなく、鑑賞を行うことによって、自分の作品との違いや共通点などを感じ、同じ目的を持った者同士で語り合うことで、充足感を強く感じる事ができる。そして、この鑑賞を通して、この場所で体験したことによって得た知識や思いがより強く残り、ものづくりへの興味関心をより持つことができると考えた。

WS の実施においては安全に十分な配慮も行った。大学生たちに中学生の役を演じてもらい、模擬 WS を本番と同じ形式で実施し、作業における問題点を洗い出し、本番中に起こりうる危険を防ぐようにした。

4. 模擬ワークショップの実施

WS 本番をより良いものとするために、本番と同じ形式で模擬 WS を二回行った。中学生役として参加してくれたのは、製造学科に所属するデザインアート部と松本研に所属する大学生たちである。



図1および図2 模擬ワークショップの様子

大学生たちの協力もあり、模擬 WS を通して、実施に際しての時間配分や材料の選定、制作における注意点などが概ね分かった。なお、ここで参加して頂いた大学生には、WS 本番にて中学生の制作補助をしてもらうことになった。

5. ワークショップの実施・様子

2014年8月24日(日)、製造棟のものづくり工房にてWSを実施した。参加者は中学生6名に引率の先生1名の計7名で行われ、指導者の土屋がWSの全体の進行を担当し、松本研とデザインアート部の学生計8名には作業の補助を担当した。



図3および図4 ワークショップの様子

まず、各中学生にはスプーンの形を考えてもらった。その後、角材に下書きを行い、その形をつくる上で不要な部分をノコギリと小刀を用いて切り落とした。中学生たちは、慣れないノコギリと小刀に悪戦苦闘しながらも、試行錯誤しながら頑張って切り落とす様子が見られた。



図5および6 ワークショップの様子

次に小刀を用いて、スプーンの形になるように削った。小刀を使ったことのある中学生は一人もおらず、小刀を持っている手の方に力を入れ、刃を深くして効率よく削ろうとするものの、中々角材が削れず、難しい顔をする中学生も多かった。しかし指導者や補助の大学生たちの指導により、徐々に小刀の扱いに慣れてきた様子が見られ、WS 終盤では中学生全員が上手に削ることが出来るようになっていた。

また、小刀での作業途中で彫刻刀を用いてスプーンの溝を彫る作業を行った。彫るためには相当な力があるので、指導者や大学生たちも手伝って、協力しながら掘り進めた。



図7および8 ワークショップの様子

その後、くり小刀、研磨紙、金工やすりなどの道具を総動員させてスプーンを滑らかに仕上げ、最後に、スプーンを水分や衝撃から守るためにクルミ油を塗って完成させた。



図9および10 ワークショップの様子

完成後、中学生たちが作ったスプーンをお互いに鑑賞し、鑑賞して思ったことや、制作して感じたことを発表してもらった。参加者たちからは「ノコギリで切るのが楽しかった」「色々な道具を使って削るのは大変だったけど、最後に、やすりがけでどんどんスベスベになっていくのはとても楽しかった」「他の作品も可愛い」などの声を頂いた。



図11, 12および13 鑑賞・感想発表の様子, 全体写真

なお、中学生たちが制作したスプーンは以下の様なものである。それぞれ、個性溢れるスプーンに仕上がった。



図14, 15および16 制作したスプーン

6. ワークショップの展示

2015年2月11日～18日にかけて『上越教育大学 芸術系コース「美術」第31回 卒業・修了研究展』（場所：小川未明文学館<高田図書館1F 市民ギャラリー>）が行われ、WSの様子を写した映像や写真、教材研究で制作したスプーンの展示を行った。展示会に来てくださった人たちは、とても興味を持って下さり、スプーンを手にとって木の感触を味わっている様子が見られた。



図17, 18 展示している様子

7. 考察

今回のWSでは中学生たち全員が怪我もなく、スプーンを完成させることが出来た。また、中学生それぞれが個性溢れるスプーンを制作しており、鑑賞・感想発表においても前向きな言葉を頂いたことから、このWSの目的である“ものづくり”の楽しさや大切さを実感出来たと考えられる。

実践者側として、このWSを行ってみて驚いたことは、中学生の制作意欲である。鋸や小刀、彫刻刀などの扱い慣れていない様々な道具を使って、木という材料をどうしたら自分の頭で思い浮かべた形にするのは、とても難しいことだろう。だが、中学生たちはその困難を乗り越えて、試行錯誤し、頑張って制作することが出来た。

今回は6名という少人数であったが、中学生たちの創造力を魅せつけられるWSとなった。だが、課題も多く残っている。中学生は基本的に休日でも忙しい場合が多いため、今回のWSでも6名しか集まらなかった。改善策としては中学校と連携を取り、特別授業という形で学校内にてWSを行うことにより、多くの中学生に参加できるようにすることなどが考えられる。また、作業時間も今回のWSでは一日をかけてしまっているため、もう少し時間短縮を図り、より気楽に参加できるよう配慮に務めたい。

現在、土屋は美術の非常勤講師を二校担当しており、中学生たちの実態把握に努めている。これからの中学生たちの創造力を高めるため、日々の授業を通して教材開発や手立てを研究し、活気溢れる若者を育てていけるよう、努力していきたい。

8. 謝辞

本WSにおいては、沢山の皆様にお世話になった。ものづくり大学本部の皆様、松本研究室卒研生の皆様、デザインアート部の皆様、行田市・鴻巣市の教育委員会や中学校の校長先生方ワークショップの実施において、多大なご協力を頂いた。関係者各位に感謝申し上げます。

文 献

- 1) 土屋悠, 美術科におけるものづくり教育の意義-木のスプーン作りのワークショップを題材として-, 上越教育大学, (2014)
 - 2) ベネッセ教育総合研究所, 第2回 放課後の生活時間調査 -子どもたちの時間の使い方[意識と実態] 速報版, (2013)12-16
 - 3) 菅谷諭, ものづくり大学平成21年度青少年教育活動報告, ものづくり大学紀要, 1, 1 (2010) 62-66
 - 4) 菅谷諭, ものづくり大学平成22年度青少年教育活動報告, ものづくり大学紀要, 2, 2 (2011) 92-95
 - 5) 菅谷諭, ものづくり大学平成23年度青少年教育活動報告, ものづくり大学紀要, 3, 3 (2012) 111-118
 - 6) 松本宏行, ものづくり大学平成24年度青少年教育活動報告, ものづくり大学紀要, 4, 4 (2013) 103-112
 - 7) 土井香乙里, ものづくり大学平成25年度青少年教育活動報告, ものづくり大学紀要, 5, 5 (2014) 85-96
-